

## 中世、芸備地方における写経とその組織について

藤 井 昭

### はじめに

芸備地方の神社には、おびただしい数の経巻類が所蔵されている。本稿は、その中から古代・中世の年記を有するものを抽出し、検討を加え、芸備地方における書写（あるいは版写）の初期の形態を説明しようとするものである。

このことは、一方では、仏教の地方伝播の問題であるが、他方では、芸備地方が一定の文化水準に到達し、文化の単なる受容者から脱皮して、自らも伝達者となる能力を有してきたことを意味する。

私は、この二十余年間に、芸備各地で経巻類を実見する機会に恵まれた。本稿は、それら経巻類調査の総括の意味をもあわせ有するものである。

### 一 写経の時代的特徴

表一は、芸備地方に現存する古代の写経一覽である。①から⑨までは、奥書などによって製作年代が明らかであり、⑩から

⑯までは、様式から時代推定をしたものである。

古代の写経で古いものに、かつて尾道市西国寺に国分寺経といわれる紫紙金字金光明最勝王経 十巻が蔵されていた。すでに国有となったが、鎮護国家の経巻として有名であった。その後のものは、平氏一門が、厳島神社へ奉納した「平家納経」に代表されるように、政治力や経済力を有する者が、自己の信仰を実現するために製作した場合が多かった。

料紙は紺紙が多いが、大和絵を描いたものもある。それに映えるように、文字には金泥や銀泥を用いた。見返しには、経の趣旨を描いた絵が付され、軸には、工芸の粹を集めた装飾が施された。このような一般的傾向の中にあつて、大般若経だけは、紙本墨書のものが多かった。巻数が六百巻と大部であったからであろうか。

書写に当たる者には、次の三類型があつた。一は、願主が自ら書写する場合で、厳島神社へ奉納の諸経がその例である。平家納経は、法華経開結ともに三十巻に阿弥陀経・般若心経と清盛願文を加えた三十三巻からなるが、清盛以下平家一門の人々

表1 芸備地方に現存する古代の写経

番号	経巻名・員数	現蔵者	形態	成立・伝来等
1	法華経巻七 1巻	浄土寺(尾道)	紺紙金銀泥・卷子本	奥書に、天曆3年(949)檀主紀則常女檀主物部氏。
2	宝篋印陀羅尼経 1巻	西福院(広島)	紺紙金泥・卷子本	康保2年(965)道喜記。旧佐伯郡円明寺のものか。円明寺は当院の所撰。
3	大般若経 600巻	本宮八幡(豊栄)	紙本墨書・現折本	永久5年(1117)細工所目代主殿首山永継寄進のものを含む。
4	大般若経 2帖	円広寺(尾道)	紙本墨書・旧卷子・現折本	嘉慶2年(1388)以前に当社へ属す。永久6年、明法生正六位上藤原朝臣季行の奥書のものを含む。
5	大般若経 25帖	大慈寺(吉舎)	紙本墨書・旧卷子・現折本	木頃八幡から別当寺の当寺へ属す。保延4年(1138)播磨書写山僧の頼書経。
6	平家納経 1具	厳島神社(宮島)	装飾料紙金銀泥・卷子本	明応2年(1493)吉舎村八幡宮へ施入。長寛2年(1164)平家一門各1巻結縁書写。
7	法華経・観普賢経 8巻	同	紺紙金字・卷子本	嘉応2年(1170)から2年間、平清盛・頼盛合筆書写。
8	大般若経 112帖	栗原八幡宮(尾道)	紙本墨書・旋風葉	承安5年(1175)藤原盛時三島大明神へ施入。天文22年(1553)当宮へ属す。
9	金剛寿命陀羅尼経 1巻	厳島神社	紺紙金泥・卷子本	治承2年(1178)平親宗船中で書写。
10	大般若経巻九十九 1巻	耕三寺(瀬戸田)	紙本墨書・卷子本	魚養発願経、薬師寺旧蔵。
11	大般若経 巻五百九十一 1巻	御調八幡宮(三原)	紺紙金泥・卷子本	文化8年(1811)青木充延奉納。
12	大方等大集経 50巻	厳島神社	紺紙金字・卷子本	
13	華嚴経 56巻	同	紺紙金字・卷子本	
14	大乘十法経 1巻	光明坊(瀬戸田)	紺紙金銀泥・卷子本	
15	無量義経 1巻	同	紺紙金銀泥・卷子本	
16	大毗盧遮那成佛経 1巻	同	紺紙金泥・卷子本	

が各一巻の結縁書写をしている。法華経・観普賢経八巻も、清盛が各巻とも前半を書き、弟頼盛が書き継いだ合筆経である。金剛寿命陀羅尼経は、平親宗が厳島詣の船中で一筆書写したものである。

二は、律令制下の工房やその系譜に属する人々の手になる場合である。本宮八幡神社蔵大般若経の奥書に、「永久五年八月廿二日細工所目代主殿首山永継進」(第二〇六巻)、円広寺蔵大般若経の奥書に、「永久六年戊戌 四月十二日奉書写畢、為現世安穩 後生善所 増長福寿矣、明法生正六位上藤原朝臣季行」(第一五三巻)などと記されている。

三は、寺僧の書写による場合である。大慈寺蔵大般若経の奥書に、「保延四年歲次 正月廿三日酉己 執筆書写山僧良範」(第二四九巻)と見られる。中世になると、この

類型が主流となる。

古代に、芸備地方で写経が行われたとの明証はない。むしろ、願主と写経の動機、経巻製作の技術、書写者の存在形態などを総合的に考察すると、都とその周辺地域で製作され、芸備地方の寺社へ帰属したとすることが穏当であろう。

表二は、芸備地方に現存する中世の写経一覽である。奥書などによって製作年代が明らかなもののみ収録した。

中世になると、芸備地方の在地豪族が願主となり、僧が書写にあたるが多くなった。彼らは、経巻を庄園や村々の寺社へ奉納しはじめたのである。大宮八幡神社蔵大般若経には、

「願以書写力 普及結縁者 同生安養界 決定成菩提 奉施入  
安芸国 志芳庄 八幡宮 正平廿年(二三五)乙巳十月 日 大願主天野

左衛門大夫藤原遠藤」とあり(第一〇巻)、在地豪族天野氏が庄園鎮守社である八幡宮へ施入したのであった。その真意は、八幡宮の神威によって在地支配の安定を願ったものであったと推察される。このような事情を背景として経巻の需要は徐々に拡大の方向に進んだ。

経巻の調達方法の一は、僧尼による書写である。御調八幡宮蔵の三蔵記集録上巻の二に「文永十二歳(二七五)乙亥才次季夏才次中四日秋原之郷 於斗山寺書写之」の奥書が見られる。斗山寺は、(一四七)文明三年六月十六日の西国寺不断経修行勧進并上銭帳には、「今高野衆」の中に記されていたが、近世には廃寺になっている。現在

の賀茂郡大和町萩原の地にあった。浄土寺蔵法華経は、多宝塔の納入品として書写されたものであるが、同寺住僧定証をはじめとする六十余人の僧名を連記した奥書を有している。先述の大宮八幡神社蔵大般若経には、「一筆書写大般若経 僧静心」の奥書がある(第三〇〇巻)。

延文・応安年間になると、一寺あるいは一人の枠を越えて、一定地域内の寺々を拠点とし、数十人の僧が書写にあたるような組織が成立している。油木八幡神社・法恩寺・永寿寺の各大般若経は、ほぼ同時期に、芸備地方の三つの地域を基盤にして製作されたものであり、次節以下で詳説する。

調達方法の二は、版木による摺写である。御調八幡宮蔵の三種類の版木と大般若経の版本は安那の在地名を冠する定親が願主となって開版あるいは摺写したものである。嘉禄・嘉禎と時期も早く、芸備地方印刷史上最古の資料として注目されている。応永年間には、浄土寺開版の法華経の版木があり、伝小早川隆景寄進の法華経版木も双三郡吉舎町の山中に収蔵されている。

調達方法の三は、他寺社よりの移動である。正法寺蔵大般若経は、周防楊井上品寺で書写されたもの。桂浜神社蔵の大般若経は、周防水上山から、淨福寺蔵大般若経も周防伊保庄賀茂大明神から移入された。久井稻生神社蔵大般若経は、伊予大浜八幡の常住物であったし、永寿寺蔵大般若経も、一時伊予朝倉郷

表2 芸備地方に現存する中世の写経

番号	経巻名・員数	現蔵者	形態	成立・伝来等
1	大般若経 2巻	御調八幡宮(三原)	版本	嘉禄元年(1225)当宮開版と推される版本で摺写。
2	阿弥陀経版木 2枚	同		嘉禎2年(1236)願主安那定親の刊記。
3	法華経普門品版木 2枚	同		嘉禎2年願主□□の刊記。安那氏か。
4	金剛寿命陀羅尼経版木 1枚	同		嘉禎3年願主定親の刊記。
5	阿弥陀経 6巻	安国寺(福山)	紙本血書・墨書・卷子本	文永11年(1274)寛の記。阿弥陀像納入品。
6	出三蔵記集録 1巻	御調八幡宮	紙本墨書・卷子本	文永12年, 萩原郷斗山寺で書写。
7	大般若経 600巻	正法寺(三原)	紙本墨書・旧卷子・現折本	弘安7年(1284)から3年間, 周防楊井上品寺で宋人謝復生一筆書写。元和7年(1621)当寺に属す。
8	法華経 28巻	浄土寺(尾道)	紙本墨書・卷子本	嘉暦2年(1327)から翌年にかけて結縁書写。多宝塔納入品。
9	大般若経	寺原八幡(千代田)	紙本墨書・折本	文和3年(1354)がもっとも古い。元龜3年(1572)当宮へ寄進。
10	大般若経 600巻	法恩寺(東城)	紙本墨書・折本	書写本は, 延文5年(1360)から康安元年(61)にかけて御調部, 越智郡付近で結縁書写。因島中庄八幡施入。元和年間, 長尾氏当寺へ寄進。
11	大般若経	大宮八幡(東広島)	紙本墨書・折本	正平20年(1365)大願主藤原遠藤当宮へ施入。僧静心一筆書写。
12	大般若経 514巻	油木八幡(油木)	紙本墨書・折本	応安6年(1373)から3年間, 尾道付近で結縁書写。尾道持光寺から当社へ移る。
13	大般若経	桂浜神社(倉橋)	紙本墨書・折本	応安7年から翌年にかけて書写。願主無参。周防氷上山から当社へ移る。
14	大般若経 393帖	永寿寺(世羅)	紙本墨書・旧卷子・現折本	永和2年(1376)から5年にかけて, 沼田庄内で結縁書写。願主三原金剛寺開山源恵。予州朝倉郷水神村大明神から本郷永福寺を経て当寺へ移る。
15	大般若経 600巻	西国寺(尾道)	版本	康暦元年(1379)近江佐々木氏開版。応永9年(1402)当寺へ施入。
16	大般若経	千手寺(東城)	紙本墨書・折本	康応元年(1389)の箱書。
17	大般若経	浄福寺(安芸津)	紙本墨書・折本	明德元年(1390)防州高尾山等で書写。享徳2年(1453)伊保庄賀茂大明神へ施入。
18	大方広仏華嚴経 60巻	大宮八幡(東広島)	紙本墨書・卷子本	康応2年(1390)から明德2年, 石見国安須那庄正法庵で書写。大願主無照光公禅師。
19	法華経版木 62枚	浄土寺		応永2年(1395)から3年にかけて, 浄土寺開版。
20	梵網経版木 6枚	同		応永11年浄土寺開版。
21	大般若経 570巻	稲生神社(久井)	紙本墨書・折本	応永13年から4年間, 伊予越智郡内で結縁書写。大浜八幡へ寄進。天正13年(1585)小早川隆景当社へ寄進。
22	大般若経 600巻	神宮寺(府中市)	版本	応永29年(1422)南宮神社へ寄進。当寺は別当寺。
23	法華経版木 61枚	保存会(吉舎)		当地は仏通寺末能引寺の跡。永禄9年(1566)隆景仏通寺へ寄進の法華経版木か。

水神村大明神宝前に存したことがあった。大宮神社蔵大方広  
華嚴経は、石見安須那庄正法庵で書写されており、西国寺蔵版  
本大般若経は、近江佐々木氏開版のものによるという。このほ  
か、古代に製作された経巻も、中世には芸備地方の現蔵者の下  
へ帰属した場合が多い。西福院蔵宝篋印陀羅尼経、本宮八幡神  
社・円広寺・大慈寺・栗原八幡宮の大般若経がその例である。  
ここに中世における文化交流の一断面をみる事ができる。

中世になると、経種では大般若経が多くなる。この経は、古  
代以来紙本墨書の形態をとる場合が通常で、料紙・軸木等に要  
する技術も比較的容易で、畿内からある程度の技術伝播をうけ  
れば、芸備地方で十分対応できることになった。むしろ、大般  
若経は、一式が六百巻と莫大な書写量を要するだけに、願主一  
人でこれをなしとげることが大変な負担であった。そこで大願  
主の下に多数の願主を集め、筆生を確保し、編成し、書写を行  
う方法が採用されることになった。

芸備各地の寺社では、大般若経の読誦がみられ、次第に真読  
から転読へと転換している。<sup>③</sup>このことを反映して、折本が一般  
的形態となった。卷子本として成立した古代の大般若経は、こ  
の時期に改装された。寺社の年中行事には、六百巻の転読を行  
ったため、経巻のいたみがはげしく、常時修理と補写を必要と  
した。それだけに異本の混入、欠巻などが目立って多い。近世  
には、牛供養・雨乞い・虫送りなど農耕行事のたびごとに読誦

され、あるいは牛の角に結びつけるなど呪具として使用されて  
いる。すでに中世にも、それに先行するような形の大般若経の  
使用がはじまっていたのではあるまいか。

## 二 油木八幡大般若経の書写と組織

備後神石郡油木村(現油木町)の油木八幡神社は、スギ・モミ  
・シラカシ・ハウノキなどの樹種でもって構成された社叢の中  
に鎮座する。木造神像三軀を蔵し、社伝によれば、仲哀天皇・  
応神天皇・神功皇后にあてる。いずれも小品であるが、台座後  
面に「文祿式癸巳歲十一月十五日 三吉清寛(花押)」の墨書を  
有する。神札用具一二〇点は、大祭・私祭の時に多種多様な神  
札を摺った版木類で、当社がかつて加持祈禱的性格を有してい  
たことを示している。毎年十月十日・十一日の例祭には、神儀  
が奉納される。古型をとどめ、参加者の多いことで有名である。

当社蔵大般若経には欠巻があるため、五一四巻が現存する。

折本で、二〇巻づつ小箱に入れられ、二〇〇巻づつ三個の唐櫃  
に収められている。各唐櫃の表面に、「大般若経」「奉納油木  
八幡総社」<sup>(三八二)</sup>「永徳二年<sup>戊戌</sup>六月二日」「備後国尾道浦」の朱字銘  
がある。「油木八幡総社」は後筆とみられる。経巻中に、しば  
しば「備州尾道持光寺常住也」とあり、「備州尾道持光寺」の  
個所が抹消されている(第三二巻)。これらのことから、永徳  
二年には、持光寺の常住物であったが、その後油木八幡に帰

表3 油木八幡大般若経願主一覧

巻	願主名	巻	願主名	巻	願主名	巻	願主名
1~20	沙弥寿阿	181~190	沙弥道忍	391~400	朝氏朝広	471~476	小輔
21~30	沙弥覚成	191~200	沙弥尼相喜	401~420	大江幸朝	477~479	仙阿
31~60	沙弥持道	201~300	権小僧都頼喜	421~430	多聞丸	480	重一
61~80	沙弥道慶	301~310	沙弥道祐	431~440	沙弥持道	481~490	沙弥覚乗
81~90	沙弥道喜	311~318	沙弥道寿	441~450	重康	491~500	大江朝尚
91~100	沙弥浄喜	320	光喜	451~452	三嶋	901~510	沙弥康心
101~110	大江朝乗	321~330	沙弥尼弥阿	453~455	道妙	511~530	沙弥持道
111~120	沙弥光喜	331~340	沙弥道一	456~458	朝長	531~540	沙弥道性
121~140	大江朝尚	341~350	沙弥道念	459	大式	541~600	権小僧都頼喜
141~150	沙弥道法	351~370	則光	460	孫三郎		
151~160	沙弥道性	371~380	福千代丸	464	太郎次郎	計	40名
161~180	大江朝連	381~390	沙弥念心	468~470	玉光		

(注) 後欠のため、願主名不明の巻があるが、10巻単位に願主を割り当てた原則があるので、これによって復元的に作表した。

表4 油木八幡大般若経筆生一覧

良盛	60巻	12, 16, 18, 20, 149, 150, 152, 169, 170, 173, 175, 177, 197, 199, 200, 277, 363, 364, 401, 402, 404, 406, 407, 410, 411, 413, 415, 416, 419, 420, 431, 433, 436-443, 445-448, 450-453, 455, 456, 458, 460, 472, 473, 475-480	慈舟	5巻	506, 530-532, 535
慶潤	41巻	14, 17, 27, 28, 48, 49, 141-143, 145, 154, 156, 157, 159, 160, 165, 168, 194-196, 212-217, 219, 220, 229, 230, 235-238, 242, 244-246, 254-256	正慶	4巻	82, 84, 86, 90
円空	19巻	261-263, 315, 318, 321, 322, 326-328, 330, 332, 333, 336, 339, 340, 351, 352, 354	少納言	4巻	112, 113, 116, 117
玄濟	7巻	61, 70, 501, 511, 517, 533, 550	了仏	3巻	124-126
明覚坊	6巻	71, 73, 74, 77, 78, 80	覚順	3巻	162-164
按察	5巻	91, 96-99	乗智	3巻	231, 232, 234
仏攝寺	5巻	202, 205, 207, 209, 210	良忍	3巻	291, 292, 294
了真	5巻	221, 222, 225, 226, 228	旨歴	3巻	357, 358, 381
慶普	5巻	281, 282, 285, 286, 290	大長寺	2巻	11, 13
			真教	2巻	131, 132
			三木	2巻	182, 187
			西福院	2巻	248, 250
			教性	2巻	252, 253
			宗舜	2巻	265, 269
			範乘	2巻	41, 296
			崇永	1巻	1
			舜智	1巻	24
			本慶	1巻	34
			明本	1巻	(82), 85
			大輔	1巻	191
			道智	1巻	(296), 298
			弁	1巻	301
			快尊	1巻	468
			計	32名	203巻

(注) 奥書の筆生名と端裏書の名前は一致するが、時に不一致の場合がある。この場合、奥書の名前を実数で、端裏書の名前を( )内の数で示した。

属し、その時に上記の抹消と加筆が行われたと考えることができる。<sup>(37)</sup>

この大般若經製作の中心人物は、権小僧都頼喜である(第三〇巻までは阿闍梨頼喜とみえる)。彼は第二〇一卷から第三〇〇巻までと第五四一卷から第六〇〇巻までの一六〇巻では、願主として記されるが、他の四四〇巻では、勅主であった。勅主は、書写の企画・立案・実施の管理にあたったようで、その下に、表三にみられるように願主が集められた。その数は四〇人で、個人別巻数で整理すると、一六〇巻一人、六〇巻一人、三〇巻一人、二〇巻六人、一〇巻一九人、一〇巻未満一二人であった。

また、名前に注目して分類すると、権小僧都一人、沙弥一九人、大江姓五人、その他一五人である。頼喜は、沙弥を冠する者と大江姓の者を二本柱として願主を集めた。もっとも、大江姓の者が僧名で願主になった場合も考えられ、その境界は流動的であったであろう。一〇巻未満の願主一二人のうち一〇人は「その他」の人々であった。しかし、彼らの中には、幼名の者がいるなど、沙弥や大江姓の人と有縁の存在であったとしてよからう。

実際に書写に当たった筆生の名前は、各巻の奥書や端裏書から知ることができた。端裏書は、本来表紙を貼付ける糊代の個所になるが、剝離した巻が多く、五一四巻中二〇三巻、三二人の名前を確認できた。表四がそれで僧名の者が多い。なお筆生

の判明率は、全巻の三九パーセントである。

次に、書写の工程を検討する。奥書に仕上年月日の記されているのは六三巻である。上限は応安六年閏十月晦日で、<sup>(37)</sup>永和元年十月九日が下限である。表五によると、<sup>(37)</sup>応安六年から七年にかけては、巻数程度を書写している範乘・玄濟・慈舟・正慶・旨歴の名前が見える。良盛は、<sup>(37)</sup>応安七年の前半期に集中的に出る。慶潤は、<sup>(37)</sup>応安八年から永和元年にかけて頻出する。他の人の名前がほぼ見られなくなる時期にあたり、未済巻の書写に当たったのであろう。書写の順がきわめて錯綜しており、また順の連続する巻も後から前に進むなどの点が認められる。

書写に要した期間は、二四ヶ月である。正法寺藏大般若經第六〇〇巻奥書には、「<sup>(37)</sup>粵自申歲弘安七年五月十五日為始、至丁亥歲弘安十年正月十八日終、合三十三箇月零三日、於周防国楊井庄上品寺東房書写此 大般若經六百卷了畢」「執筆大宋国建康府住人謝徳改名復生法名明道」とあり、一筆書写で三三ヶ月余を要したことがわかる。両者の単純な比較は危険であるが、参考として掲げておく。

書写場所としては、「大田今高野」(第二五〇巻)、「備後国岩成庄於法成寺仏撰寺」(第四一〇巻)、「備後国御調郡尾道於西国寺尾崎坊」(第四六〇巻) それに「安養寺」(第一巻)がみられる。文明三年六月十六日の西国寺不断經修行勸進并上銭帳に、今高野衆、法成寺衆の中に仏性寺、多門寺衆の中に安養坊があり、

表5 油木八幡大般若経巻別仕上年月日

年 月 日	筆 者	巻	年 月 日	巻	年 月 日	巻
応安6・閏10・晦	範 乘	41	良盛執筆の巻		永和元・7・16	165
〃 12 7	玄 濟	61	応安7・正・13	410	〃 〃 24	195
〃 〃 〃	玄 濟	70	〃 4 5	440	〃 〃 27	196
〃 〃 12	玄 濟	511	〃 6 25	460	〃 〃 28	194
〃 〃 13	(不明)	513	〃 7 10	170	〃 〃 晦	48
〃 〃 18	玄 濟	517	〃 〃 16	420	〃 8 3	49
〃 〃 25	(不明)	524	〃 〃 18	480	〃 〃 7	220
応安7・正・1	(不明)	527	慶潤執筆の巻		〃 〃 10	219
〃 〃 〃	(不明)	528	応安8・3・26	246	〃 〃 14	217
〃 〃 3	不慈舟	530	永和元・4・16	245	〃 〃 17	216
〃 〃 4	玄 濟	501	〃 〃 18	244	〃 〃 21	215
〃 〃 17	慈 舟	531	〃 〃 21	242	〃 〃 25	214
〃 〃 25	(不明)	538	〃 5 1	154	〃 9 3	213
〃 〃 27	(不明)	540	〃 〃 14	156	〃 〃 4	229
〃 3 7	玄 濟	550	〃 〃 15	157	〃 〃 5	212
〃 8 8	正 慶	90	〃 〃 17	159	〃 〃 9	235
〃 〃 12	旨 歴	357	〃 〃 20	160	〃 〃 20	238
〃 〃 14	旨 歴	358	〃 〃 24	141	〃 〃 30	230
〃 12 5	旨 歴	381	〃 〃 28	143	〃 10 3	254
応安8・3・26	(不明)	247	〃 6 21	14	〃 〃 6	255
永和元・7・7	良 忍	294	〃 〃 24	17	〃 〃 9	256
〃 10 19	範 乘	296	〃 7 13	168		

西国寺有縁の寺であった。現在の地名でいえば、今高野は世羅郡甲山町、仏撰寺は福山市駅家町法成寺、西国寺は尾道市土堂町、安養寺は芦品郡新市町に所在した。安養寺は尾道市後地にも同名があり、研究の余地がある。

筆生には、奥書に署名した者と端裏に記名した者の二階層があったので若干の考察を加える。前者では、「豊州人事玄濟」(第六一巻)、「豊後州丹生庄人事玄濟」(第五二巻)、「備後州西国寺常住豊州玄濟」(第五〇巻)、「豊州慈舟」(第五三〇巻)、「賀州旨歴」(第三八巻)等他国から来往した僧の存在が浮かび上ってくる。彼等は書写についての専門的知識のゆえに願主と同格の署名をなしたのではあるまいか。良盛は約六ヶ月間で判明した巻数だけでも六〇巻を書写したが、当初は仏撰寺にあり(第四一〇巻)、後に西国寺へ移っている(第四六〇巻)ことから、一寺に定着した存在ではなかったといえよう。慶潤になると経巻書写への関わり方からして、書写の総仕上げの大役を果たしたと推定される。

後者では、たんに僧名のみを記した場合も多く、確かめようもないが、寺名を記した数例がある。「西福院」(第二五〇巻)は、今高野山十二院の一であり、「仏



撰寺」(第二〇二巻)は、法成寺にあって、良盛も止宿した寺であった。在地の僧の多くは、このような形で書写組織の中へ組みこまれていたと考えられる。

### 三 永寿寺・法恩寺大般若経の書写と組織

永寿寺は、備後世羅郡田打村(現世羅町)にある臨濟宗寺院である。『世羅郡誌』は、応安二年九月の創建とするが、本尊阿弥陀如来坐像の胎内には、「為信心大施主散位平吉清北方御所生 息災延命 徳寿快樂也 承元<sup>(一一〇)</sup>一年五月 日造立之」の墨書がある。

当寺蔵大般若経は、第二〇〇巻代と第三〇〇巻代を集中的に欠いており、三九三帖が現存する。「于時文明<sup>(四七〇)</sup>二天<sup>(一)</sup>丁<sup>(二)</sup>菊月廿日 大願主藤原実正」(第六二巻)、「与州小千郡朝倉郷水神之村大明神御宝前 大願主藤原実正」(第一九一巻)などの奥書後筆があり、文明二年には、伊予越智郡内の神社へ寄進されていた。その後、安芸豊田郡船木村(現本郷町)永福寺を経て、当寺へ帰属したものである。

「大願主金剛寺開山源恵」(第四三三巻)が、書写の中心であった。金剛寺は、「備州三原金剛寺源恵」(第一六三巻)とあり、三原に存したから、『芸藩通志』巻十三に「廢金剛寺 会下谷にあり、今堂あり」と記される寺であった可能性が強い。

奥書により、書写のもっとも早いものは、「永和二年霜月廿<sup>(三七〇)</sup>

四日」(第一二二巻)で、「永和五年<sup>己未</sup>卯月三日」(第四三六巻)が新しい。この間には約二八ヶ月である。

書写場所として次の寺があげられる。

芸州香根島長善寺(第一九一巻)

芸州沼田庄梨子羽郷楽音寺中坊(第四一三巻)

芸州沼田庄内楽音寺大善坊(第四三三巻)

安芸国沼田庄於藝沼山東禪寺大坊(第五〇二巻)

安芸国沼田生田(第五五一巻)

安芸国沼田庄於老田寺(第五五五巻)

備後之國御調之郡三原之大智坊(第五七一巻)

香根島は、豊田郡に属した(現瀬戸町高根島)。また第二〇〇巻に「芸州沼田庄内香根島長善寺」とあり、沼田庄に含まれていたことがわかる。楽音寺は、同郡南方村(現本郷町)にあり、山門十八坊の中に中坊・大善坊の名がみえる。東禪寺も南方村にある。生田寺と老田寺は同音同寺で、近世には三原府(現三原市)へ移っているが、もとは釜山村(現本郷町)にあった。大智坊のみ所在を逸している。

第二〇〇巻までは、長善寺で書写されている(第一九一巻・第一九二巻・第一九八巻・第二〇〇巻など)。このあたりでは、筆生の名前を欠くものが多く、「願主源恵」とのみ記される場合が多い。源恵自書の可能性が強い。第四〇〇巻代(第四一三巻・第四三三巻・第四三三巻・第四三四巻・第四三六巻・第四三七巻など)

は、楽音寺の諸坊で書写された。筆生の名前が奥書に見られているが、源恵も「大願主金剛開山源恵」と格調の高い署名をしている。第五〇〇巻代の初め(第一〇二巻・第五〇四巻・第五〇八巻など)は、東禅寺で、中ほど(第五五一巻・第五五二巻など)は生田寺での書写である。終わり(第五六一巻・第五七一巻・第五七三巻・第五七六巻・第五七七巻・第五七九巻など)は、三原大智坊である。全巻が、長善寺・楽音寺・東禅寺・生田寺・大智坊と順序に従って割当てられ、実施も各寺の主体性に傾斜をかけて進められたのではあるまいか。

前節の油木八幡蔵大般若経は、寺よりは僧の把握とその編成によって、書写が実施された。永寿寺蔵大般若経は、沼田庄内の真言寺院の編成を中心とし、各寺に属する僧によって書写されたとみられる。注目すべきは、「筆者北州越中住礼珍」(第一八三巻・第一八四巻)である。彼は、単なる旅の僧ではなく、中世に漂泊をつづけるさまざまな芸能者(技術者)の一人であって、写経進行のための知識や技術をもちこんだ人ではなかったであろうか。

法恩寺は、備後奴可郡川西村(現東城町)にある真言宗寺院である。寺伝によると空海の開基とするが、再度の火災のため古文書・宝物類を失っている。慶長年間、長尾氏の祈願所となる。同氏が福島氏に従って東城を離れるにあたって、居城世直城の什物であった大般若経を当寺へ寄進した。経櫃の蓋裏に「備後

州怒哥郡東条世直山之常住物 城主勢州之住佐々木末孫長尾隼人正求之 慶長拾七子林鐘吉日法恩寺之住法印有頂祈願之時」の墨書があり、当時の城主長尾隼人正一勝が入手したものである。

この経は、南都版四八二巻、美作版三二巻、筆写本八四巻、鉄眼版九五巻の四系統六九三巻から構成される。重複があるため六〇〇巻を越えている。今問題にするのは筆写本で、前二者を補充する形で成立した。

八四巻中六六巻に奥書があるが、延文五年四月廿日から(三三六)康安元年六月下旬にかけて、兼尊を大願主として書写されたものが多い。一一巻は永和元年九月季秋日から同四年十一月三日にかけて書写されたもので奥書の記載の仕方にも相異がみられ、さらに「金源山徳長寺常住願主元勝」などであり、兼尊の企画とは別に行われたようである。

兼尊(教養で貞通と連書)は仕上った経巻を「備後国因嶋中庄八幡宮奉入」したのであった。次に代表的な奥書を掲げる。

「大願主 兼尊

于時延文五年五月七日於備後国御調郡河北庄今田浄土寺書

写畢

雖為惡筆且為結縁且期当来無漏之智恵間乍憚乍恐染筆了  
六百卷内三卷書写之

小比丘 宥增生年廿七歳

(第四四六巻)

「日本第一雖為惡筆為結縁一卷一筆如鳥跡執筆与州越智郡高橋別名内泰山寺住侶金剛仏子定明廿九歳

于時延文五年三月廿三日辰尅計書写畢

(第四七一巻)

大願主兼尊

予州越智郡三嶋別宮住侶 弁房良秀

春秋 四七歳

延文第五天孟秋下旬比書之

(第四七八巻)

「備州因嶋中庄八幡宮奉入

延文三年二月廿八日始之次康安元年辛丑六月下旬結願之

予州越智郡泰山寺住聖善景生年卅三

大願主 兼尊 貞通

(第五〇一卷)

書写場所の記載があるのは、右四例のみであった。浄土寺は、備後御調郡今田村(現御調町)に所在する真言宗寺院であり、当寺と伊予越智郡内の泰山寺・三嶋別宮の組合せで、書写は進められたと考えられる。「六百巻内三巻書写之」「一卷一筆如鳥跡執筆」など、零細な書写を集積して、全巻が仕上がったことを示す内容もみられる。永和元年九月季秋日に成立した第二〇一卷の奥書には「十巻檀那 西阿弥陀仏」と記されている。このような数巻を書写した筆生の参加の理由は、「結縁」のためが

すべてであった。しかし立場を変えてみれば、仲間の連帯を確認し、強化する意味もあわせ有した。

安芸豊田郡乃美村(現豊栄町)の本宮八幡神社蔵の<sup>(四七七)</sup>大般若經六〇〇巻は、文明九年に重修が行われている。「于時文明丁酉霜

月念九日重修覆之 細工与州三嶋住人 村上門梵智生年廿七歳」(第二〇七巻)、「文明丁酉霜月於則光幸福寺修覆之」(第二〇巻)の両巻奥書によると、則光(吉原村、現豊栄町)の幸福寺(現光福寺)で村上梵智が二度目の修理を行ったのである。

中世の芸備地方の寺社では、書写のほか、このような修理が頻繁に実施されていたのである。

### おわりに

油木八幡・永寿寺・法恩寺の<sup>(四七八)</sup>大般若經は、延文五年から永和五年にかけて、尾道・三原・沼田庄・伊予越智郡などを中心とする地域で、三集団の結縁によって書写されたものである。これ以前の<sup>(四七九)</sup>一筆書写もどちらかといえば瀬戸内海に近い場所で行われた。中国山地に比べて、この地域は、真言宗の普及度の高さ、交易によるすぐれた経済力の蓄積があった。写経の背景には、このことを認めないわけにはいかない。

今後に残る問題の一は、写経組織の結合原理についてである。「結縁」のためとはいえ、具体的には、大願主・願主・筆生の考えは一様ではなく、さまざまな期待が一定の所で調整さ

れてまとめられているようにみられるのである。二は、写経組織が庄園組織や在地支配とどのように関係するかということであり、三は、芸備地方で製作され、他地方へ流出した経巻をも調査対象に加える必要があることである。

最後に、秘蔵の経巻類の拝観をお許し下さった所有者の皆さんへ深甚の謝意を表したい。とりわけ、本稿で経巻を直接の検討資料とさせていただいた油木八幡神社平郡義彰氏、永寿寺元泉宗純氏、法恩寺金銅興哉氏へは重ねてお礼を申しあげる。なお、現地で出内博都氏・橋本敬一氏・難波宗朋氏に種々学恩を蒙っていることも付記しておく。

注

- (1) 本宮八幡・円広寺に現蔵する経の多くは中世の書写であるが、古代書写のものも若干含んでいる。
- (2) 西国寺文書。
- (3) 例えば、寺原八幡神社蔵大般若経第五〇巻奥書に「奉転説此御経借用太田庄八幡宮一七日参籠僧栄貴 于時観応元年八月廿八日」とある。
- (4) 「大般若経目録」が同社でプリント刊行されている。
- (5) 行基開基と伝える真言宗の古寺。室町時代には、足利將軍や備後守護など武將の崇敬をうけ、彼らの後援で堂塔を再興した。
- (6) 難波宗朋氏著「法恩寺縁起」が刊行されている。
- (7) (6)に同じ。

On *Shakyo* (A Transcription of the Buddhist Scriptures)  
and its Transcribers in the Geibi District in the Middle  
Ages

Akira FUJII

**Abstract**

There are quite a lot of the Buddhist Scriptures collected in the Buddhist Temples and the shrines in the Geibi District. I intend to make clear in this paper in which period and in what situations *Shakyo* was begun after making a list of the Buddhist Scriptures with the names of the periods of the ancient and medieval ages written in them.

In the ancient ages, the men with strong political and economic power, such as Taira-no-Kiyomori, who dedicated the so-called 'Heike-Nokyo' to the Itsukushima Shrine, often dedicated the Buddhist Scriptures to the Buddhist Temples and the shrines to strengthen their religious faith and the scriptures were written on beautiful colorful paper with pictures sometimes drawn on it with golden or silver-colored letters. This kind of technique could be used only in the studios in the so-called 'Ritsuryo-Period' in the ancient ages or in the studios influenced by them after the period, but there is not any clear evidence that the technique was used in the Geibi District, therefore we cannot conjecture it easily.

In the medieval ages, they began *Shakyo* in Geibi District, too, and *Shakyo* was done in certain temples in the Kamakura Period. In that period, the scriptures were written on paper by using Chinese ink, and the technique was rather simple. In the Muromachi Period, the temples or the groups of the priests in the certain districts began *Shakyo* in groups. The examples are: the groups of Kongoji Temple in Mihara, Saikokuji Temple in Onomichi, Jodoji Temple in Kawakita and so on and they acted in the same period.

In this period, The Buddhist Scriptures were written to be used in the temples and the shrines in the manor called 'Shoen' or the villages rather than to be used for the individuals and their families, and so they were in great demand and at the same time they had to repair the damages of the sutras without fail.

These things are regarded as a process of the spread of the Buddhism to the local regions on the one hand, but on the other hand it can be said that the culture of the local regions rose to a higher level and the local people, who had only enjoyed the benefit of culture, became the persons who could convey their culture to other people.

The contents of my paper are to be stated from the view of the latter.